



教職大学院

Newsletter No.

77

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2015.10.31

「学びに向かう力」をつなぐ幼児教育研修システムの構築

福井県幼児教育支援センター・福井県教育庁義務教育課幼児教育支援グループ主任 齋藤 弘子

福井県幼児教育支援センターの挑戦

福井県は、平成24年10月に「福井県幼児教育支援プログラム」を策定し、同11月に幼児教育支援センターを立ち上げました。センターの職員4名（幼児教育指導主事1名と生活科・総合指導主事1名を含む）は、教育庁義務教育課幼児教育支援グループ勤務を兼ねています。

センターの使命は「福井型18年教育のスタート期の充実」であり、市町と園を支援するための仕組みを構築することです。小1プロブレムの解消を目指す連携事業ではなく、子ども一人ひとりが希望に向かい自ら学びに向かう姿を求め、「学力の基盤としての資質・能力」の育成を目指すものです。

そのために、福井県では、27年3月に「福井県保幼小接続カリキュラム」を策定しました。そして、4月からは、幼児教育力向上の鍵となる推進人材「市町幼児教育アドバイザー」「園内リーダー」を養成する研修をスタートさせており、子どもの姿を通して教師・保育者が学び合う「接続」のための幼児教育研修システムを構築しています。

「保幼小接続の推進」と「幼児教育力の向上」

保幼小接続には、小学校教育と幼児教育の相互理解が不可欠です。幼稚園だけでなく、幼保連携型認定こども園が学校教育に位置づけられ、27年4月には子ども・子育て支援制度がスタートしました。量の拡充から質の向上へと、幼児教育が深化する中、保育所・幼稚園の歴史的な背景も踏まえた上で、次のような課題の解決が必要となっています。

○公立・私立の保育所・認定こども園、公立幼稚園、私立幼稚園では、県・市町ともに所轄が異なる場合が多く、連携推進体制が一本化されていない。

○小・中・高校教諭への研修体制と比べ、幼児教育の研修体制の整備が不十分である。

○保育士・幼稚園教諭・保育教諭の年齢構成の特性として、20代前半がピークとなっており、経験知が園内に浸透しにくい。

共働き率全国1位の福井県は、保育所に通っているお子さんが大変多く、小学校入学前の5歳児の保育所通園率は7割を超えています。園種・設置者の垣根を超えて、幼児期の遊びを通じた教育について理解を深め、幼児教育力を高めていく必要があるのです。

福井県保幼小接続カリキュラム「学びをつなぐ希望のバトンカリキュラム」

保幼小接続を推進するためには、就学前の教育が、小学校の前倒しや準備という理解でなく、生涯学習の根幹として理解され、園や小学校に自覚され、子どもの学びを促す支援が現場で行われなければなりません。カリキュラムは、5歳児と小学校1年生の2年間を見通し、「学びに向かう力」の育成を核としたねらいと道筋を明確化しており、大きな二つの特徴があります。

① 子ども一人ひとりの「学びに向かう力」の育成に重点を置いたこと

内容

- 巻頭言 (1)
- シンガポール・北海道ラウンドテーブル報告 (3)
- スタッフ・院生紹介 (13)
- スクールリーダー便り／院生からの報告 (15)
- 研究紀要・実践報告書の紹介 (22)

② 小学校教育との接続の観点から、「5歳児が経験すべき内容」を明確化したこと

「学びに向かう力」は、協同性・学びの芽生え・道徳性を包括し、幼児教育から小学校教育につなぐ本質的な考え方を示すものとなります。楽しみ、試し、工夫し、見通しを持つなど、子どもが意欲を持って主体的に遊びや生活を進め、多様な気づきを得ていくことを大切にします。また、友達と一緒に楽しむ協同活動を通して、実現する喜びや自己肯定感を育みます。小学校へのあこがれや自信を膨らませ、小学校以降の意欲や集中力、持続力、道徳性などにつなげていきます。

また、幼児期にふさわしい園生活や遊びの中で、5歳児が経験する内容を明確化し、小学校の教育につながる体験の内容を「言葉」・「数」・「自然」・「約束」の四つのカテゴリーに分け、具体的に示しています。

幼児教育研修システム

「作成したカリキュラムをいかに実践に役立たせるか」という課題は、多くの自治体が抱える課題であり、「実践化」の流れを生み出し続けることがシステムとして重要となります。27年度よりスタートした研修では、「これからの幼児教育」を見据え、保育所・幼稚園・認定こども園、国公立・私立の枠を超えた共通テーマ「遊びの中の学び」を研修の柱としています。

市町幼児教育アドバイザーは、市町レベルで域内の園へのアドバイス等を行う人材であり、各市町が推薦の上、1年間研修を受けます。園内リーダーは園内研修・研究会を活性化させる人材として、希望する園から推薦されます。市町、園種の入り交じる様々なメンバーで構成されたグループで、「遊びの中の学び」や実践事例について語り合いながら実践研究を行っていきます。

福井県の研修システムの大きな特徴は、幼児教育支援センターと福井大学教職大学院がチームとなって研修を実施しているということです。

研修は、講義だけを組み立てたものではなく、実践のリフレクションを柱にし、センター職員と教職大学院のメンバーが合同で行います。研修の事前・事後には、幼児教育支援センターと福井大学教職大学院との定期的な話し合いを持ち、幼児教育研修の検討・再構築に生かされます。

また、市町幼児教育アドバイザーの園支援の演習として、福井大学教育地域科学部附属幼稚園の研究集会を研修に活用し、教職大学院ラウンドテーブルにてセンター職員や市町幼児教育アドバイザー等が成果を発表し、小学校・中学校・高校・特別支援学校の教員との意見交換を行います。研修を生かして、多様なつながりを生み出そうとしています。

今年12月25日には、全国から教育行政・養成大学・園現場の関係者の方をお招きし、幼児教育フォーラムを開催します。多くの先生方とともに、「保幼小の学びのつながり」と「育成すべき資質・能力」について考える機会とさせていただきたいと思います。どうぞ福井県にお越しください。

接続には、「異質なものとかわり、葛藤しながらも相互理解を深め、自らの本質的な課題に向き合い、教育力を向上させる」という大きな流れを生み出す力があります。福井県幼児教育支援センターは、人材の育成を通して、学び続ける園文化の醸成を図り、県全体の幼児教育力向上と、異校種間の学び合いを目指しているのです。

※福井県幼児教育支援センターのHPにて、「保幼小接続カリキュラム」「幼児教育フォーラム」に関する情報を提供しています。

幼児教育支援センターホームページ

<http://www.pref.fukui.lg.jp/doc/gimu/youjikyoku/youjikyoku.html>



シンガポール・北海道ラウンドテーブル報告

シンガポールの教育に思う

福井大学教職大学院 小林 真由美



今回のシンガポール視察では3つの学校に訪問し、それぞれの学校で授業を見せていただいた。昨年度、訪れたオランダや中国に比べると子どもたちの様子は、とても日本と似通っている。緊迫した雰囲気

で必死に学ぶ中国の子どもたち、自分から学びを深めようと探求心旺盛なオランダの子どもたち、2つの国では、日本の子どもたちよりずっと一生懸命な姿に驚いたが、シンガポールの子供たちはある意味、とても日本的(?)であった。まずは、私たちが教室に入ると必ず先生からの指示で「G, G, Good morning.」と少し恥ずかしそうに挨拶する。そろえようとするがなんとなくばらばらなのも日本的。授業の初めは張り切っているが、後半あたりはちょっと退屈そうなりアクションがあったり、一部の子どもに立ち歩きがあったり、発表の声がちょっと小さかったり…。それでも興味深い問いには、主体的に考え、積極的に挙手する姿があり、それはまさに日本の子どもと同じである。しかし、一方で授業づくりのコンセプトは



日本と少し違っていた。私が一番感銘を受けたのは2日目の Clementi Town Secondary School で参観した音楽の授業であった。日本の音楽の授業はたいてい1つの教材を使う。歌唱であれ器楽で

あれ、何かの曲が介在する。私がみた音楽の授業には曲がない。「pa!」「ha!」「si!」といった発声のみで1時間が構成される。35人くらいの中学1年生が4つのグループに列で分けられ、パートごとの発声で合唱する。それぞれのパートで発声するが部分的に全員がそろ



そろう箇所があってそこは教師の指揮に注目しないとそろわない。この授業のねらいは「合唱の際の指揮者への注目の重要性」であろうと容易に想像できた。パート①②③④の順でグループを設定して何回か練習し、④③②①のパートにチェンジする。チェンジしたばかりは楽譜を見ないと発声できないので、そろわない。何回か繰り返す内に顔を上げて指揮者に注目する子供が増えてくる。何度か担当のパートをチェンジしたあと「では今の自分の担当パートのままで、各担当がいる4人のグループを作りなさい」と指示。日本と同じように男女がそれぞれ別々に4人グループを作るが、案の定、最後は何人かの子どもたちが余ってしまう。そんなところも日本でありがちな光景である。しどろもどろ1人の女の子とあまり気が合わなそうな男の子3人が1グループになる。4人で唱うのだと思っていたがなんと先生から「円を作りなさい」と指示され、全員が一つの円になる。4人はそれぞれ違うパートが隣に来て、自分のパートは隣の音を頼りにすることはできずに自分で唱う。何回か繰り返す内に美しいハーモニーができて、子どもたちも笑顔で思わず拍手する。先生はそこで本日の主発問「この状況の中、美しく合わせるのに大切なことは何か」を問う。「違うパートの音も聞くこと」「テンポを合わすこと」「各パートの同調化」など合唱で大事なことが次々と出てくる。そして「指揮者をよく見ること」という本日のねらいは子ども



たちの最も多くの意見として出される。先生の力量も高く、引きつける力もあるからだろう。彼等はこの一時間の見事な流れの中で合唱のポイントを習得した。日本では見たことのない授業である。しかしながら、なんだろう、この違和感は何？果たして彼等はこの一時間で学んだ指揮者をじっくり見ることの重要性を、例えば「ハレルヤ」の合唱の際に思い出すのだろうか。日本では「ハレルヤ」を歌いながら指揮者を見ることを学んでいく。日本では歌が作り上げられていくその過程の中で、指揮者を見る重要性を学び、それと同時に美しいハレルヤを作り上げていく。シンガポールの徹底的に基礎だけを学ぶというカリキュラムは、音楽だけではなく。数学では、中学2年までは基礎基本のみを扱う。日本では高校で学ぶ二次式の割り算は、一次式の場合とやり方が同じという理由で中学2年で一次式の割り算のすぐ後に取り上げる。翌日訪れた高校の数学では、図形と関数を絡めた問題がコンピュータで提示されたが、図形的な意味に全く触れることなく、数字だけの操作で「こうすれば解ける」を見つけ出していった。技能は技能で早い段階で徹底的に学んで、その基本を土台にして、その後に問題解決していくというベースは、ある意味、習得すべき部分を確実にすることができる。確かに彼等は「指揮者を見て歌う」という技能だけをしっかりと学んでいた。それもまた一つの考え方として日本にも学ぶべきところがあるのかもしれない。美術の作品を見せていただいたが、中国のように技法を徹底的に練習した上で、模倣ではなくクリエイティブに描くことを新たに学ぶので、日本では考えら



れないほど緻密で美しい作品が仕上がっていた。習得と活用を織り交ぜながら展開していく日本のカリキュラムの難しさを改めて考えさせられた。本当の創造性を養うにはどちらが有効であろうか。もちろん、どちらが正解という答えはないが、美しい景色、考え尽くされた観光、国を挙げて取り組む教育、成果を急ぐシンガポールの思いが何となくよくわかる。などと、考えながら授業後のカンファレンスに向かう。岸野先生の美しく柔らかな英語での実践報告が心地よく私の耳に響く。「これが日本の授業だよ」と自分に問い返すと「学校が嫌いという子どもも少なくはないですよ」とシンガポールの先生から一言……。今こそ伸びるとき！と競争をあおり立て、一律の教育を強いて「真似て做う」学びを誘発する中国、私は私とゆったり構え、子どもたちに自由に考えさせ探求心を引き出そうとするオランダの「任す」教育、そして今や教育こそが国家戦略と成果を求めるシンガポールは「習得」と「活用」を分離させていた。それぞれの国の事情が教育体制をつくり、その教育体制が子どもを変えていく。産業化社会に終わりを告げ新しい時代の到来に変革を起こそうとする日本には、日本なりの教育を進めていかねばならないのだろう。国が教育を変え、教育が国を変えるのである。帰りの飛行機では、英語で映画を鑑賞した。少し理解できるようになったことが本当にありがたい。この貴重な経験をどうすればお返しできるだろう。実のある素晴らしいこの5日間を振り返りながら、これからの自分の在り方もそして日本の教育の向かう先までも、漠然とながら真剣にずっと考えていた。

違いを超えて見えてくるもの

～教師教育研究に関する調査 in Singapore～

福井大学教職大学院 宮下 哲

1 はじめに

言葉、風習、教育に対する要請・・・異なる状況の中で行われる実践を目の前にすると、私自身の実践や見聞したものとの差が気になり疑問が生じる。私の場合、そうした疑問をベースに事象の分析にかかると、既存の価値観によって実践の良し悪しという二項対立の分析になる傾向がある。しかし、「目の前の事象は、実践者の何らかの思考や判断、行為の累積による必然だ」と考えて、そのいきさつを想像し把握しようと努めると、「やっぱり、そうか」と頷ける共通項が浮かび上がる。今回の調査の中で様々な発見をするたびに抱いた「やっぱり」の一部を言葉にしておこうと思う。

2 文化を耕すという取組 ～ Lesson Study から Lesson Study Learning Community へ ～

Secondary School での地学の授業は2人の教員が担当し、教師が準備したプレゼンテーション教材によって授業を展開していた。途中、生徒が教師の発問や友の問いを共有できず、授業が停滞したり理解が深まらなかったりする場面が何度かあったが、このときの T1(授業を主導する教師)と T2(個別支援や授業を補佐する教師)の対応が印象的だった。生徒の学習状況が芳しくないと察した T2 が、T1 と意気合わせて板書をし授業を主導する対応を始めたのだった。私がこれまでに経験している TT の授業で T2 が躊躇なく積極的に指導に入る実践の多くは、T2 の力量が高く T1 との人間関係が良好であるか、授業のねらいや展開について事前に相談し教材作りを行い、ねらいや指導方法・評価規準を相互によく理解しているなど、何らかの協働的な取組の存在が要件だった。随伴してくださった先生に、本校にもそのような取組があるのかを尋ねると、「地学の教員の場合は協働で打合せや教材作り振り返りを行っている」「そのような取組を通して、教師が相互に情報交換し学び合うことの大切さを実感し始めている」「他教科でもその可能性を探っている」とのことだった。



教師が単に協働で授業づくりをするだけでなく、実践・省察・再構成を積み重ねる組織を形成することの意義は、私たちも実感している。また、予備調査で読んだ NIE の Christine Lee 先生の資料にも「同教科あるいは教科を超えた教師の協働実践により学校文化を耕す」取組とその成果についてのデータが紹介されており、こうした取組が Singapore でも「やっぱり」求められているのだと思った。

また、Primary School や Junior College の理科や数学科の授業では、体験を通して得られる子どもの発見をもとに問いを練り上げ、クラス全員で解決する問題を明らかにする場面を参観した。私は中学校学習指導要領解説～数学編～(平成20年9月)の「数学的活動は主として問題解決の形で行われる。すなわち、問いの発生、問いの定式化と問題の把握、問題の共有、解決の計画・・・」というくだりを想起しながら参観した。事象に対する子どもの必要感や必然性のある問いの文脈づくりへの配慮がないことには少なからず疑問もあったが、授業後に理数科の教育を担当する Senior teacher が G. Polya の文献をもとに授業づくりのコンセプトを報告しており、着目するところは「やっぱり」近いと思った。その上で、理論と実際の授業との乖離を防ぎ、授業の中で子どもの姿で具体化するために必要な教師の技を確かなものにするためにも、教師が学び合うコミュニティを構築し、その文化を耕す具体的な取組の中で専門性を開発することが必要だと再確認したことである。



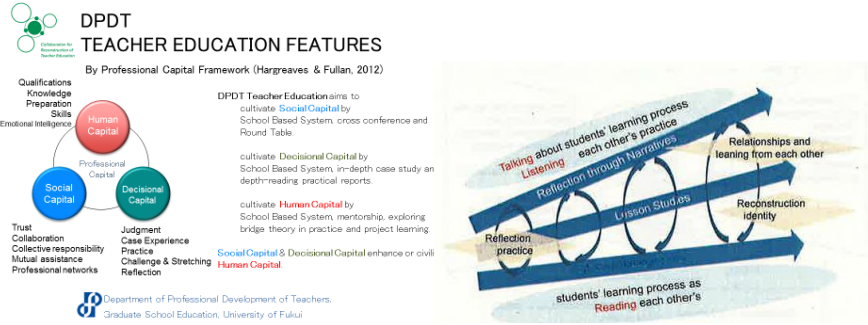
3 課題に向かう勇氣

このように「やっぱり」と頷ける共通項が見出される一方で、一見異なって見える実践から学び合う取組を進めるためには、その方向や方法についての調整が「やっぱり」必要だという課題も予感した。異なる文化や背景をもつ実践者が、二項対立でない新たな展開の可能性を協働して拓こうとするには、学力観や学習観を相互に調整する場面が必ず来る。ときには痛みを伴うこともあるだろう。何をどのように行い、かつ評価しそれを可視化するのか等を厳しく問う声に、明瞭・明確な答えを求められる場がますます増える。

…しかし考えてみれば、こうした課題は異国との連携・協働に限ったことではなく、私たちの日常的な取組においても同様である。課題に対する取組はこれまでも存在しているし、具体的な実践における思考と行為の緊張関係から目を逸らさずに記録し妥当性を判断し続ける厳しさや意義とともに、そのような取組の確かさを私たちは実感している。

今回の調査の担当者は渡航前の学習会で、木村優准教授や岸野麻衣准教授から提供された資料をもとに、本教職大学院の取組が教師の資本に培い、教職の専門性が養われることを構造的に確認した。また、個々のカンファレンスや集中講座等を通してリフレクションを深めその記録に基づいて長期実践報告書を作成するカリキ

ュラムの確かさなどを確認した。私たちがもっているこうした知を、1つずつ「やっぱり」と確認し味いながら、それらを道標に、道標をどう表現するのかを探りながら、文化を耕す実践に倦まず弛まずに臨みたい。



シンガポール視察を通じて得た学び

福井大学教職大学院 半原 芳子

この夏シンガポールの教育視察という貴重な機会をいただいた。シンガポールはマレー半島の南端に位置する東京23区ほどの面積を持つ都市国家である。周りを大国マレーシア、インドネシアが囲む。今年6月シンガポールの視察団が福井を訪れた際、シンガポールでは国防費の次に教育費に国のお金が使われていることを知った（後に調べたところによると国家予算全体の20%が充てられている）。今回シンガポールでは、NIE (National Institute of Education), HAIG Girls School, Clementi Secondary School, Tamasek Junior College への訪問、そして福井とシンガポールとの間のイノベーションスクールネットワーク構築に向けたNIEと代表校との協議等を行ってきた。事前の学習会、そして実際の視察を通じ理解したことは、シンガポールにおいて教育は「生命線」であるということだ。

シンガポールの教育体系は、初等教育 (Primary) 6年、中等教育 (Secondary) 4～5年、中等後教育 (Post Secondary) 1～6年というものになっている。初等教育、つまり小学校卒業時の試験結果によって中学校に進む者、職業訓練校に進む者といった具合に進路が定まっていく。このような選抜は中等教育以降も続く。シンガポールでは日本のような入学試験はなく、Nレベル (Normal Academic Level) ・Oレベル (Ordinary Level) ・Aレベル (Advanced Level) と呼ばれる認定試験によってどのような中等教育機関・中等後教育機関に進むかが決まっていく。

シンガポールの日本人学校にかつて勤務されていたある先生のレポートによると、シンガポールの教育が期待する人間像は「リーダー」と「大衆」に二元化されているとあり、なるほどそうかもしれないと思った。正直こうした選抜システムに違和感を持ったが、そうせざるを得ないシンガポールの状況があることもシンガポールの地を訪れて分かったことだ。

国土も小さくこれといった資源も持たないシンガポールは非常に多くのものを輸入に依存している。現地の知人曰く「毎日食べる野菜の葉っぱ一枚まで輸入」に頼っており（野菜の自給率は7～8%程度）、また水の大部分を隣国マレーシアから買っている。そうした状況において、科学技術は自分達の生存を左右する極めて重要なものとなる。例えば、長年の水問題を解決するために、下水を高度処理した再生水「ニューウォーター」がある。つまり下水を飲めるまでに高度処理する技術を開発し、マレーシアへの水依存を脱却していこうとするものである（余談であるが、ある学校を訪問した際昼食をその学校の先生方と一緒に食べる機会をいただいた。その時ペットボトルの水を見て「これはニューウォーターかな」という会話が普通に行われていた。それほど国民にとって当たり前のものとなりつつあるのだと感じた）。野菜も自給率向上を目指し新たな農業モデルが開発されているという。有事の際はたちまち軍事滑走路になるだろうと思われるまっすぐに延びた何車線もある幅の広い道路、所狭しと林立する高層ビル群、高度

な科学技術，そしてその科学技術を開発する人の育成をねらいとする選抜システムを持った教育体系。このような事象から私の中で膨らんだある種の「緊張」は，一方で，中華系・マレー系・インド系をはじめとする多様な人種の共存とそれを可能にしているシンガポールの人達のあたたかで人間的な行為にて緩和される。

シンガポールでは，各学校で木村先生，二宮先生，岸野先生，ポーリンさんが，教師の長期に渡る力量形成を支える教師教育のあり方を，教職大学院の試みや附属中学校での取り組みをもとに提案された。シンガポールの先生方は非常に熱心に耳を傾けておられ，また多くの質問もされ，実りある実践交流の時間となった。日本，シンガポールを含む世界の子どもの未来は教育にかかわる者同士の交流によっても耕していける。今回のシンガポール視察では世界の教育を知ること，そして他国の先生方と実践交流をしていくことの意義と可能性を知ることができた。「教育のためにまだまだ自分にできることはあるのかもしれない」そんなことを思いながら，日々切磋琢磨していきたいという思いを強くした視察だった。

※写真は、「プレゼンテーション」の時間に新たな農業モデルについて発表する Tamasek Junior College の生徒達と，附属中学校の授業研究を同学校

の先生方に発信するポーリンさん。子どもたちも先生方も肌の色，母語，宗教等実に多様だ。



2015 札幌ラウンドテーブルの試み

～実践交流の文化の形成に向けて～

福井大学教職大学院 杉山 晋平

7月30日・31日の2日間にわたり，市立札幌大通高等学校で「2015 札幌ラウンドテーブル—教育の鳥瞰視点と現場の専門性—」と題する実践交流会がひらかれ，校内外から約50名の参加者が集いました。

同校は，これまで多くの教員が福井のラウンドテーブルに参加し，福井県の教育や福井大学の取り組み，全国の先進的な実践との交流から刺激を受けてきました。また，教員のみならず，同校の教育活動の年間のリズムに組み込みながら高校生セッションに生徒たちを派遣していただけてきました。毎年秋には，福井大学からも数名のスタッフが札幌市教育委員会や札幌市立高校を訪問して，高校教育改革をめぐる実践交流を重ねてきました。

今回のラウンドテーブルには，福井大学からは，これまでの相互交流でご縁のあった松田淑子先生，宮下哲先生，山崎智子先生，富永良史先生，加藤正弘先

生，杉山が参加しました。また，北海道大学からは篠原岳司先生，奈良女子大学附属中等教育学校から鮫島京一先生がかけつけ，実践交流の輪に加わりました。実際の実践交流の様子については他の参加メンバーからの報告に任せ，形式的な紹介になりますが，私からは市立大通高等学校と今回のラウンドテーブルの概要について紹介します。

札幌市には，市立高校が8校設置されており，各校が特色ある独自の取り組みを積み重ねてきました。さらに2003年度より始まった「札幌市立高等学校教育改革推進計画」では，社会変化や学びのニーズの多様化を背景としながら，「進路探究・国際化・情報化・カウンセリング体制」の充実を柱に据え，各校の特色を活かした教育改革の方向性が設定されました。その改革の要の一つが，2008年4月，それまでの市立

高校 4 校の定時制課程を統合して札幌市中心部に設置された市立札幌大通高等学校です。同校は、生徒数が千名、教職員も百名をこえる大規模な定時制高校です。開校以来、三部制と単位制を組み合わせながら、「進路探究学習」と「学ぶ意欲の育成」を教育活動の核として、多彩な授業科目を軸にユニークな教育実践を試みてきました。

かつての勤労青少年の在籍が減り、困難な状況に置かれた生徒たちを含め、さまざまなニーズをもった生徒たちの在籍が増えているという状況は定時制課程に広くみられます。大通高校においても、開校までの準備期間に新しい学びのコンセプトが練り上げられましたが、それを具体化していくのは教員自身の絶え間ない挑戦に委ねられていくことになります。困難を抱える生徒たちにかかわりながら、その後の生徒たちの人生に向けて高校教育に何ができるのかを常に模索し続けてきた 7 年間の実践の歴史、それが今回のラウンドテーブルの開催に結びついたと感じています。また、大通高校は「社会に近い、ひらかれた高校」として、地域社会の多様なコミュニティとの連携にいち早く取り組み、教育実践・生徒支援の体制整備を進めてきました。校内研修を緩やかに外部にひらきながら開催に辿り着いた今回のラウンドテーブルでは、これまで同校の教育実践・生徒支援にかかわってきた校外のメンバー、そして、他の市立高校の教員、多様な実践の価値に光を照らし合う、貴重な実践交流になりました。

次に、2 日間のプログラムを紹介します。1 日目は、オープニングの後にパネルディスカッションがひらかれました。このパネルディスカッションは 2 段階で構成されており、前半は大通高校の外部協力者が登壇し、同校へのかかわりをふりかえりながらその意味を交流するという内容でした。後半は大通高校の教員が登壇し、それぞれの実践をふりかえりながら互いの試みの意味とこれからを展望するという内容です。このパネルディスカッションの設定意図は、(1) 今回のラウンドテーブルの参加者の広がりを書いて全体で共有し、(2) 後続のラウンドテーブルでの実践交流を活性化するための実践紹介の機能にありました。特に、後半の「大通の教員のしごとを知る」は、富永先生のファシリテーションによる“大喜利”形式で進められ、登壇者の言葉から会場全体でテーマの本質にせまっていくという興味深い展開が生まれました。また、この形態は、既に昨年度の奈良女子大学附属中等教育学校公開研究会で試行されていたもので、両校の交流・協働を支えとするチャレンジでもありました。



続くラウンドテーブルでは 6 名ごとにグループに分かれ、各グループにファシリテーターが 1 名、報告者が 2 名（実践報告は 1 人につき約 1 時間）が入りました。今回のラウンドテーブルで特徴的だと感じたのは、この実践交流を 3 セッション展開するという形式です(1 日目午後・2 日目午前・2 日目午後)。できるだけ多くの実践を聴き合いながら、参加者各自が聴き手・報告者・ファシリテーターといったそれぞれの役割から実践交流の場を支える経験も共有する、という意図に基づくものでした。今後に向けて、実践交流の文化の担い手を増やし、育てていくという点で大変興味深い工夫だと感じました。また、セッションが進むにつれ、各グループと会場全体の実践交流の活気が相互に作用していく様子が印象的でした。

思い返せば、初めて福井のラウンドテーブルに大通高校の先生をお呼びしたのは、2012 年 6 月のことでした。「これを札幌でどうひらいていくか」という話題は、その当初から持ち上がっていたものでした。そこには、ラウンドテーブルという方法論が自分たちの教育改革に結びついて生まれる価値への予感がありました。しかし、その実現までには、できるだけ時間をかけることも大切にしてきました。この試みは、職場・地域に根ざした実践交流の「文化」をいか



に形成していくか、その文化を担う人をいかに育てていくかという問いであると直感していたからです。結果的には3年間という短い準備期間となりましたが、その間、私にとって大通高校の先生方は協働実践研究のパートナーであると同時に、この「文化」をめぐる問いを探究する方法論研究のパートナーでもありました。昨年度の校内ミニ・ラウンドテーブルの試行が今年度の実施を後押しする形になりましたが、次年度以降の開催については慎重な検討が重ねられています。実践交流の持続的展開を支える条件の整備（財源・時期・組織連携・研修カリキュラムとの連動）やそのコーディネートをめぐる課題もより鮮明になりました。この「文化」に価値に共感し、その担い手の輪に加わる仲間を地域にもっと広げていく工夫も必要です。

急速に変化していく地域社会において地道に積み重ねてきた教育実践の価値を捉え直すこと、そして、その試みの価値を学び合うコミュニティを形成すること。今回のラウンドテーブルを通じて、その確かな手応えが、札幌に残されたと感じています。今後も福



井のラウンドテーブルの長い歴史、各地のラウンドテーブルの展開からもより多くを学ばせていただきながら、札幌市の試みを支援していきたいと思います。

末筆になりましたが、夏の集中講座や教員免許状講習がひらかれる時期に多くのスタッフの参加を調整していただいた教職大学院に感謝を申し上げます。

ラウンドテーブルだからこそ「響き合」う「よさ」

— 2015 札幌ラウンドテーブル—教育の鳥瞰視点と現場の専門性— 参加記録

福井大学教職大学院 宮下 哲

1 はじめに



「ラウンドテーブルとカンファレンスには似たような『よさ』もあるが、ラウンドテーブルだからこそ顕在化する『よさ』もある」「福井ラウンドテーブルへの参加者が感じた『よさ』の機微を、これから参加する人々も感じられるように工夫し、実現のときを待ったことが、今回のラウンドの立ち上げを確かなものにしていないか」…そんな問いが大通高校でのラウンドテーブルの後、じわじわと立ち上がっている。

ラウンドテーブルやカンファレンスは、ワークショップではない。テーマが与えられ、そのテーマについて模造紙を広げて付箋を貼って、何かしらの合意を形成したり到達点を見出したりすることとは趣が異なる。それぞれが自分の歴史性をもっていて、その歴史性を言葉にする、聴き合う…という活動を行う。その活動を通して、互いの歴史性が響き合う。どのように響き合っているのかに焦点を当てたとき、ラウンドテーブルがカンファレンスとは異なる「よさ」が見えてくるように思う。

札幌ラウンドテーブルを終えて大通高校を後にするとき抱いた問いの中身について、もう少し言葉にしておこうと思う。



2 ラウンドテーブルだからこそ顕在化する「よさ」

ラウンドテーブルやカンファレンスは、何らかのゴール地点の確認や合意形成を目的とした学会や

研究発表会や研修会とは趣が異なる。改善点や批判的な見解が提案されることもあるが、その応酬に終始することはまずない。成果や課題を発表し、その成果や課題解決の方略などが認められるか否かを確認することに主眼があるわけではないからだ。また、与えられた課題やいわゆる理論を、体験的に解決したり知識として伝達したりするワークショップや研修会とも趣が異なる。

もちろん、ラウンドテーブルやカンファレンスにも、何らかのゴール地点の確認や合意形成、知識や技能の獲得という面がないわけではないが、それが「よさ」の全てではない。「よさ」は、自身の実践をじっくり語り聞いてもらうと共に、互いが互いの振り返りを支え合い、次の展望を探っていくという営みの中に潜んでいる。カンファレンスには、名人芸とか熟練とか秘技などと呼ばれる、実践の中で暗黙的、無意識的、自動的に生成される知の生成過程に光を当て、拠り所としているフレームを明らかにするという「よさ」がある。臨床的な事例研究であるカンファレンスでは、実践の展開におけるその時々の思考や判断、配慮などを、実践者が他者にもわかる言葉を模索しながら語る。聴き手も、その実践の展開に学びながら、関連する自分の実践を想起してその時々の思考や判断などをとらえて語る。そのような聴き合い語り合いの中で、互いがもつ思考や判断に共通する構造が浮かび上がっていく「よさ」である。そのような「よさ」は、より多様な実践の歴史をもつ多様な人々が集まるラウンドテーブルにおいて、ますます強化され、従来から慣れ親しんだ足場の確かさが把握される。更に、カンファレンス以上に多様な実践の歴史をもつ人々が集うラウンドテーブルでは、互いがもつ歴史性が「響き合」うことで、足場となっている構造自体を問い直すことを促すような「響き合」いとなることもあり、これがラウンドテーブルだからこそ顕在化する「よさ」ではないかと思う。

自分自身の足場が危うくなることは、ゴール地点の確認や合意形成、知識や技能の獲得を主眼とする取組においては危機であり、できれば避けて通りたいことだったりする。しかし、ラウンドテーブルでは、自分の前提を問い直すことで新たな展望や可能性が見出されることが愉しになる。自分の変容することも厭わない、むしろ変容する可能性を探りに行く中で、従来の足場が、自分が慣れ親しんだ領域だけでなくさらに広い領域にも活用できそうだという予感をもったり、より広い領域に活用するためにさらに深く検討する必要感を強くしたりする「よさ」を味わい愉しくなるのである。

3 札幌ラウンドテーブルで、私はどのように「響き合」ったか



今回のラウンドテーブルでもそのような「響き合」いが、何度も体験されたのだが、前提としていた足場の確かさを問い直し、改めて従来の足場の確かさをとらえるとともに、さらなる探求の必要感を「強く促された」という印象がある。その要因はいくつもあるのだろうが、大通高校に集った人々の多様性や歴史性が広く厚かったことが大きいと思う。

例えば、1日目冒頭のパネルディスカッションのパネリストの選定では、本校の喫緊の課題に対して様々な領域と連携協働して形成されてきた関わりの多様性を踏まえて行われており、キャリア形成支援・福祉系支援・外部活動支援・協働校・研究支援と幅が広い。更に、パネリストは、さっぽろ青少年女性活動協会、有限会社 sany, 札幌市こぶし館、奈良女子大学附属中等学校、福井大学において、それぞれに長期にわたって実践を積み重ねており、その歴史性には確かさと深さが伺われた。その後、各テーブルを囲んだ人々の実践も同様だが、各自がもつ歴史性の広さと深さによって、私自身の中で起きる「響き合」いもまた深く厚く促されていったのではないかと思われる。

1) 思考や判断・表現に共通の構造が浮かび上がるように「響き合」う



他者の実践の中に「やっぱりそうだ」ということと出会うと、自分の思考や判断・表現の確かさをとらえられたような気がして勇気が出てくる。

例えば、西野巧泰さん（大通高校教諭）の報告。釧路の高校教諭の頃の話や TOKA 会などで、殊に子どもの学びのために様々な年齢や業種や経験をもつ人とかかわる実践の中で、そのような人々と自分が共鳴し実践が展開していくいきさつについてお聞きした。「高校って、外部の人間がどこまで入っているのかわからなくて躊躇する」「何かをしたいという気持ちはあるが、それが学校でできるのか、何ができるのかが分からない」と思っている人たちと、どのように実践を紡いできたのか、そのときの自身の思考や判断を、今どうとらえているかという報告に強く魅かれた。「学校職員も一緒にやりたい」と思っている」というスタンスを伝えたり、実現可能なことや mission だけでなく、「こんなことができたらいい」という希望や夢を共有したりする取組の中で、「それいいね！やりなよ」と後押しされたり「俺たちが学校に行って生徒に働きかけようか」と支えられる実践が展開したりしていくというのだ。「こんなことがしたい」「どんな自分でありたい」という希望や夢を実現する「仕掛け」を、みんなでいくつも出し合い、少しずつ緩やかに vision が明らかになっていく奮闘は、グループのメンバーの体験とも重なるところが多かった。また、そのような取組が持続的に展開するためには、「発信」と「本物を求める」がキーワードだという予感も語られた。「学校を開こう」とスローガンを掲げていても「今どんな（状況、希望、夢）なのか」を具体的に発信し外とつなぎに行く動きをつくらないと実現しないこと、「本物を求める」からこそ探求的な学習が展開し多様な人が協働する可能性が開いていくこと、「ごっこ」では短期的な追求やお試しにしかないため探求的な活動になり得ないこと・・・などをお聞きした。

西野さんのお話を、私自身の、算数・数学や総合的な学習の時間などの授業や単元づくり、学級づくり、校内研究体制づくりやそのサポート、コミュニティ・スクールに関わる活動などでの経験を参照しながらお聞きした。そして、「やっぱりそうだな」と思うたびに、これまで私が思考や判断の拠り所としてきたものに光が当てられたり、未来への展望が開かれたり、複雑な事象や課題に出会っても以前よりも少しだけ勇気をもって踏み出す意欲や自信が強化されたりするようだった。

2) 自分の思考や判断の前提となっている領域自体を問う、境界線を引き直すように「響き合」う

一方で、私が拠り所としている前提の確かさや、そもそも前提の適用範囲・・・領域についての認識を広げる必要性を迫られて、考えを巡らせ沈思せざるを得ない場面もあった。



例えば松田考さん（さっぽろ青少年女性活動協会）や、宍戸勝さん（札幌市こぶし館）の報告の中で私は、私自身のあり様を問うこととなった・・・子どもを真ん中にしてその子の学びを支えると言いながら、そのとき視野にある子どもや子どもに関わる人々をどのように想定しているのか。その人々の関係性をとらえようとするときの立ち位置の多様性はどうか、あるいはそれらをどの程度の時間軸の中でとらえようとしているのか・・・と、その視野を広く多様にもったとき、これまでにしてきたことやこれからしようとしていることに確からしさはあるのか・・・などについての問いである。

関わる人がもつ背景も年齢も多様だが、それらの人々との関係を紡ぐ時間についての覚悟は、私の前提を大きく揺らした。同じ年齢層の子どもや、同じ年齢層の親と関わるのがほとんどで、多くの場合数年のかかわりを想定している私にとって、「彼らの悩みや願いや夢・・・を『もやっ』と受け入れる場をつくる」「心のよりどころの一つとなり続ける」（松田さん）「その人の生活と仕事をセットにして、

長続きするように」「一生を通してフォローする長いお付き合いを『覚悟』する」(宍戸さん)と明るくさわやかに語られるお二人の実践は、魅力的であると共に、必ずしも長くない時間軸で学びをとらえようとしていた私の、かつての忸怩たる思いを想起させたのだった。

心のどこかにいつでもある苦い思いと向き合うのは、なかなかしんどいことだが、お二人の報告を受けた語り合いが今後の展望へと話題を移したとき、私の中の忸怩たる思いが少しだけほぐされていくような気がした。それは、例えば宍戸さんの「できないことをやらせると我慢を強いることになる。しかし、ちょっとやっつけていい、ちょっと間違っている、ちょっと褒められてできることが見えてくる…そのようにして、ここが気を遣わなくていい所だと思われる…何かこれでもいいですね」「だからこそ、できる人が、そのときにできるだけのことをしていけるようにしようと思うんです」という語り合いに勇気づけられる。そして、松田さんの「学校と外の場にある人が、子どものために自分たちが学習する場をもつという連携の形もある」「教員やユーザーなどがそれぞれの専門性を交流させて力量を形成し合う場をもつことで、若者や弱者の夢や希望を『もやっ』と受け入れる場も持続的に存在する可能性が広がる」という予感に、私のこれまでを未来に向けてどのように開けばよいのかというアイデアが見えてくる。そして、私の前提を刷新するのではなく、緩やかに包み込むもう少し広い領域とその中で私のあり様や挑戦の方向性を予感したように思うのだった。

4 おわりに

札幌でのラウンドテーブルでありながら、「ここは福井か」と思わせるほど、今回のラウンドテーブル

に流れる空気は「よさ」を含んでいたように思う。その要因はいくつもあるのだろうが、企画し運営された方々を中心に実感されていたラウンドテーブルの「よさ」という種が、札幌の地に蒔かれ、芽吹きのための適切な時期を見定めてきた過程の確かさによるものが大きいのではなからうか。



仮にそうした学習を経ずに、形式のみを取り入れて、いきなり風呂敷を広げて出発したらどうなっていたら。臨床的な実践研究と言いながら、従来の「たいていの学会なり、研究発表会なり」へと瓦解していったかもしれない。あるいは、単なる振り返りや雑談の場で終わっていたかもしれない。自分の前提を問う必要に迫られたときには、そのように足場を揺るがす危機を排除するために相手を説得したり安易な妥協をもとめようとしたり、そのような問い自体を無視するようなことになっていたかもしれない。

今回の実践に至るまでに培った足場の上で、多様性と歴史性を担保した充実した「響き合」いを実現し、参加者が「よさ」を味わった北海道札幌でのラウンドテーブルは、きっと持続的に展開していくに違いないと思われた。

2015札幌ラウンドテーブルに参加して

福井大学教職大学院 加藤 正弘

7月30日から2日間行われた2015札幌ラウンドテーブルに参加しました。

開校8年目を迎える札幌大通高校は単位制のカリキュラムを持つ、3部制(午前部、午後部、夜間部)定時制高校です。4年前に完成した新築校舎は、打ちっ放しのコンクリートがそのまま生かされ、吹き抜けの広いフロアには最上階まで一方向でつながる大きな階段が鎮座しており、およそ学校という印象はありません。それは、生徒の多様なニーズに応

えようと学校内外の様々な教育資源を生かす柔軟さを育てているように感じます。

初日、富永ファシリテーターがホストになってすすめる「大喜利」では、大通高校職員が登壇し、出された「お題」について考えをフリップに書いて一斉に見せ、パネリスト相互に意見を交わしていきます。そこでは、大通高校の生徒像や組織的な取り組みの理解を深めていきます。次の外部協力者によるパネルディスカッションからは、次々と発展拡大し、拓かれていく学校外での学びの場を俯瞰すること

ができました。3コマあったラウンドテーブルは職員をはじめ他の参加者がグループを変えて語り合い、聴きあう場です。主に、職員からの報告が中心となったことから、日常的に取り組んでいる部活動、校外学習、総合的な学習の時間、生徒会活動、困難をかかえた生徒への支援、地域や大学との連携などの実際の様子が報告されました。そこから見えてきたのは、大卒の教育課程や分掌体制は持ちながらも職員の自由度と教育活動の範囲は広く、実践をすすめながら修正、改善を絶えず加えていく職員自身の姿でした。実際、このラウンドテーブル開催中の最中でも、部活動や保護者懇談会が次々と展開されており、職員数80名のうちの20名前後の職員が都合をつけて代わるがわるラウンドテーブルに参加しているという様子からも理解できます。おそらく、学校長による一元的な学校経営のもとに教育課程が具体化されているという学校ではないのでしょうか。職員と生徒の相互関係の中から生まれた発意をもとに実践を試し、振り返りながら修正を加えていく中で教育的な価値づけをしていくプロセスが大事にされる学校であるように感じました。

そのような中で、「みつばちプロジェクト」やメディア部のミニFM局開設が展開されてきたのではないのでしょうか。それは、学校としての必達目標があつてそれに邁進する教育実践をすすめるのではなく、職員の持つ様々な価値を実践として具体化していく過程で職員集団の持つ“望ましい考え方”が収斂し、それが変化していく過程を作り出す営みに他なりません。こういう意味で、時代や社会情勢の変化に強い、進歩的でねばり腰の学校経営が職員と外部協力者によってすすめられている様子を理解することができました。

会場に貼ってあったポスターには、過去の福井大学ラウンドテーブルに複数年にわたって参加した札幌大通高校職員の何人もの姿がありました。おそらく、福井大のそこで自らの実践を語り他の報告を聴くことを通して彼らの概念が再構成され、新たな価値づけと発意を持つ区切りとなっていたに違いありません。そういう意味で、本学教職大学院が果たしてきた役割を札幌で垣間見た2日間でもありました。

スタッフ・院生紹介



ダイクス 久美子

教職大学院担当の事務補佐員をしています、ダイクス久美子です。教職大学院について何もわからないところから始まり、2度のラウンドテーブルを経て、事務補佐員として働き出して約10か月となりました。最初は民間と大学法人との違いに戸惑うことも多かったですが、今ではようやくその違いにも慣れ、先生方ともうまくコミュニケーションが取れるようになってきたのではと思います。

ここで働き出してから、様々な会議やラウンドテーブルなどのイベントに参加させていただきました。そこでは、今まで民間の英会話学校でマネジメントをしながら英語講師をしてきた私にとって、ここで

だいくす くみこ

の仕事では新しく学ぶことばかりです。また、ラウンドテーブルでは、ハーグリーブス先生と鈴木寛先生と対談の場に同席させていただく機会を頂きました。まだまだ教育の専門用語の翻訳には不慣れで、初めて聞く言葉も多くありましたが、お二人の意見交換される様子やお話しされる内容に非常にインスパイアされました。これからも自分なりに関心があることへの学びを深めていきたいと、感じたのでした。

今はまだ、こちらに来て1年も経っていないので、普段の業務になれるよう一層の努力が必要です。しかし、それと同時に、これから増えていくであろう、外国学生たちや外国人教員の方々のサポートをスムーズにできるような職員を目指し、日々自分ができることから取り組みたいと思っています。これからもよろしく願いいたします。

(教育地域科学部支援室 事務補佐員)



牧本 尚也 まきもと なおや

はじめまして。2015年7月1日より教育地域科学部支援室総務係に配属となりました牧本と申します。教職大学院の予算管理や旅費手続等を主な業務としております。よろしくお願いいたします。

私は、福井大学教育地域科学部学校教育課程、同大教育学研究科教科教育専攻を修了した後、2009年より同大事務局で勤務しており、人生の約半分、福井大学のお世話になっております。学生時代は森先生の教育史の講義を末席で聴講したり、探求ネットワークに参加して柳澤先生のお話は難しいなと感じていたりで（ごめんなさい）、正直不真面目な学生だったようにも思います。しかし、職員として、本学の特色ある取組であり大きな柱である教職大学院の素晴らしい取組を見聞きしていく中で、今回自分にとって縁のある場所でもある本業務に携わらせていただくこととなったことに、大きな喜びを感じています。

通常業務と平行して、現在は減量活動にも取り組んでいます。就職してからの運動不足ゆえか学生時代より体重が約20キロも増えてしまい、昔を知る方からはふくよかな体型を指摘されるようになってしまいました。現在は、私の事務所が1階にあり、教職大学院は6階がメインスペースのため、必ず階段を使って登るようにしています。一步一步階段を踏みしめると、自然と自らの業務を振り返っていたり今後の展開を考えていたりすることが多く、非常に有意義な時間となっています。この3ヶ月で成果は出ていませんが（むしろ若干増量？）、スリムな体を取り戻すために、運動と間食控えをがんばります！

最後に、事務支援という間接的なかたちではありますが、本学教職大学院の取組がより充実したものとなるよう貢献していきたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

（教育地域科学部支援室総務係）

高松 由紀子 たかまつ ゆきこ

福井市安居中学校から参りました高松由紀子です。今年度から教職大学院教育学研究科教職開発専攻スクールリーダー養成コースで、学び直す機会をいただき、心から感謝しています

教職に就いて現在まで、生まれ年の性格もあり、ただひたすらにまっすぐに駆け抜けてきました。20年以上学級担任をさせていただきましたが、振り返ってみると、どんなクラスを受けもっても、生徒と正面から向き合い、生徒とともに歩む教師であることが一番のモットーだったように感じます。ここ数年は、勤務校の研究や福井地区の国語科の研究に携わることが多くなり、もっと自分の見識を広めなければ…と、大学院で学びたいと考えるようになりました。そして、教員として大先輩だった父に、大学院へ行こうかどうか迷っているときに、「できるときにできることをしてみたら」と言われ、背中を押してくれたことが最後の決め手になりました。

現在の勤務校である安居中学校は、福井市西部の緑豊かな地域にあり、全校生徒100名余りの中学校です。全校一体型教科センター方式を採用し、社会参画型学力の育成を目指しています。平屋建ての円形の新校舎を建設し、小中併設から移転開校して4

年目。これからは、学校の本当の強みは何か見極めてさらに高みを目指す重要な時期だと感じています。

安居中学校と教職大学院との関係は深く、前校長の津田由起枝先生や現校長の北典子先生、他にも大学院で学んだ先生方がいらっしゃいます。また、ラウンドテーブルには、2年前から生徒も参加し、既に堂々とポスターセッションを行っています。こんなに先輩方が多いことに、心強く、そして誇らしく感じています。

私も、微力ながら一翼を担えるように、ここで出会う大学の先生方をはじめ、仲間からも多くを吸収しつつ、学んだことを還元できるようにしていきたいと思っております。

最後に、私の好きな言葉について触れたいと思います。それは“えん”です。まるい円、ほのおの炎、妖艶の艶、ご縁の縁、えんにも素敵な言葉がいろいろあります。その中で、私が一番好きな言葉は「縁」です。縁は「えにし」や「ゆかり」と読むこともあり、人とのつながりには欠かせない言葉です。人は縁によって生かされていることをこの大学院で実感しつつあります。この2年間、いや一生になるかもしれま

せんが、皆様とのご縁を大切にしつつ、過ごしていきたいと思います。よろしく願いいたします。

スクールリーダー便り

気がついたら 埼玉県立新座高等学校 金子 奨

いつの間にか「リーダー」的な位置に立っていたのである。

自分としては「組織」にはうまくなじめないし、境界線すれすれの端っこにいるほうが性に合う。責任を免れたいわけではないのだけれども、歴史学や民俗学が明らかにしてきた「異人」「まれびと」「遍歴する道々の輩」のような存在に魅せられてしまう。

1980年代の大量採用の終末期に教職に就いたという条件も、そうした個人的な資質に拍車をかけることとなった。そう、後輩がいないのだ。社会科の教師としてスタートを切って30年間、同じ教科にぼくより若い教師がいたことはほとんどない。いつも先輩教師の後姿を見ながら、「そうではない教師」像を追い求めることを余儀なくされてきたのである。

40代前半、新座高校に着任して雲行きが変わる。ぼくを「師匠」と（陰で）呼ぶ若い教師が登場し、あつという間に立場が逆転してしまったのだ。

それまでひとりでひたすら前を向いて進んできたのに、突如、その若者の姿を見ながら後ずさりするように歩むことを強いられはじめたのである。おとなが子によって親になることを促され、教師が生徒によって先生らしくさせられるように、ぼくは後輩によって遅まきながらも「先輩」に仕立てられてきたということである。自意識としては「若手」のつもりだったのに、いつの間にか「中年後期」の域に達していることを自覚せざるをえない立場に追い込まれていた—このあたりのジェネラティヴィティにかんするライフストーリーの考察は、高井良健『教師のライ

フストーリー：高校教師の中年期の危機と再生』（勁草書房、2015年）に詳しい（ぼくは「東野」という仮名で登場している）。

そんなこんなで9年間、新座高校で仕事をしてきた。気がつけば、職場の半数は20代から30代前半の教師に入れ替わっている。彼らに伝えたいことはたくさんある。しかし、伝達が限りなく不可能に近いことは、30年の教職経験で痛いほどわかっている。だから、できるのは彼らとともに考え、判断し、活動することだけだ。先輩によってあれこれ明示されるよりも、「え？ どういうこと？」という違和／異和が若い教師の熟達を促す。「しっくりこない」という感覚をお手軽に消化してしまうのではなく、内化できない異物として向きあい、自分のことばに昇華しえるかどうか、教師の試金石となる。

「リーダー」的な立場は秩序の維持を強く要請されるのだろうけれども、これまで出あってきたステキな校長は、境界線を攪乱するトリックスター的な存在だった。いや、安定しているかに見える学校という組織は、動的な均衡の上にかろうじて成り立つものなのだ。とすれば、残された時間はそう長くはないけれども、内／外の境界線を跨いでそれをたえず揺り動かす異人的な教師でありたい。

というよりも、壁に風穴を穿ちつづける存在、それがどのような立場にあろうとも、教師であることの第一の定義なのだ。たえざる脱自経験を強いられる者、それが教師なのだから

鯖江市豊小学校 上島 雅恵

鯖江市豊小学校は、市の西側に位置し、山や田に囲まれた自然豊かな地域にある小学校です。児童数334名、13学級の学校で、本年度から特別支援学級が新設されました。今年、校舎の建て替え工事が終わり、3月に落成式を終えたばかりの新しい校舎で、教室前にオープンスペースを配した開放的な造りになっています。朝、子ども達は学校へ来ると、ゆったりとしたグラウンドに飛び出して元気に活動しています。

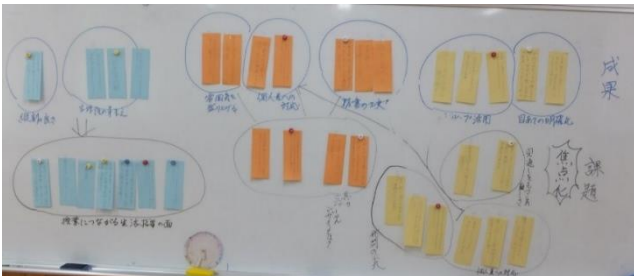
我が校では、「自ら学ぶ、心豊かでたくましい子どもの育成」を学校教育目標に掲げ、日々教育実践にあたっています。重点目標の1つである「開かれた学校」の取り組みとして、保幼小中連携教育を推進しています。小中の交流は約10年前から中学校校区内で行って行っていました。さらに、昨年度までスタート・アプローチャカリキュラム事業のモデル校として、3年間の指定を受け研究実践を行ってきました。交流活動を基盤として、幼小がさらに連携を深め、幼児教育の

遊びを通した学びが「学びへ向かう力」となって、小学校教育へとつながっていく接続の機会となりました。

本年度本校の研究テーマを、「学びをつなぎ、主体的に学ぶ子どもの育成～子どもが見通しをもって学び、自分の考えを表現できる授業作り～」と設定しました。昨年度から、授業のユニバーサルデザイン化の研究に取り組んでおり、授業の焦点化・視覚化・共有化を意識し、子ども達が見通しをもって学べるような授業づくりを行ってきました。そして、1時間の授業の後半には、ふり返しを行い、1時間の授業の学びを再構築する中で、次時への意欲や課題をつかむようにしました。本年度は、授業のユニバーサルデザイン化を土台に、「子どもと教材がつながる」「子どもと子どもがつながる」「子どもと環境がつながる」を三つの柱として、研究を進めています。

まず、子どもの学びを支える教員の学びが大切だと考え、研究主任として、教員の「協働」を仕組んでいます。

昨年度から、授業研究会をより充実したものにしていけるために、授業参観時の視点を明確にし、KJ法で成果と課題を整理し、授業改善に活かすようにしています。本年度の算数科の授業公開では、「授業のユニバーサルデザイン化」「見取った子どもの学び」について付箋に書き出し、5名の小グループで、ワークショップを行いました。まず、グループごとに貼った付箋から見えてくるテーマと課題を用紙にまとめます。少人数なので、気軽に発言できる雰囲気です。どの教員も思いをしっかりと述べることができ、協議が活性化しました。また、低・中・高学年部会でグループに分けて子どもを見取ったことは、視点が定まって良かったという高評もいただきました。今後も教員一同授業を視る目を養っていきたいと考えています。



学期末の研究部会では、KJ法の手法を取り入れ、短冊カードに学期の成果と課題を書き込み整理することで、共通理解を図っています。短冊カードを貼りながら、思いや経験を語り合うことで、新たな視点に気づいたり、教員同士の相互理解にもつながったりしています。

昨年度から、研究テーマのもと一人1研究課題として取り組んだことを、冬季休業中に実践交流会を開くことで、教師自身の振り返りを行っています。自分の実践を振り返り、語ることで、省察が行われ、それをみんなで共有することができました。今後も、教員自らが振り返りを通して、じっくり考える場を設定していきたいと思っています。



あわせて、教職大学院や県教育研究所の先生方と連携を取りながら、現職教育を進めています。8月の現職教育では、大学院の宮下哲先生に「『算数・数学科における問題解決の形』について考えよう」というテーマで模擬授業をしていただきました。問いから仮説を立て、想像力を働かせながら見方や考え方を確かめていき、一般化を図るという展開です。後期の指導主事訪問時の共同参観授業に向けて、刺激的な提案授業となりました。同じく8月の現職教育で、教育研究所の先生方に助言いただきながら、全国学力調査の自校分析を行いました。2学期には、鯖江市独自の確認テストの分析も行い、両テストから見たわが校の課題に対し、低・中・高学年部会でそれぞれ取り組んでいくことを決めました。外部の目を入れて、開かれたシステムづくりを行っています。

採用3年目の教員が、進んで専門教科の学びのコーナーを作ったり、中堅の教員が、多目的ホールを天体空間として学習環境を整えたりと、教員自らが学び研究し続ける姿が見られる学校です。私自身も、大学院で新たな視点や刺激をもらいながら、学校現場

で共に学び続け、一緒に成長していきたいと思いません。

勝山市立鹿谷小学校 平林 茂将

赤とんぼの舞う秋晴れの中、校内マラソン大会に向けて子供たちと走っています。走りながら、この「スクールリーダー便り」の締め切りも、頭の中をぐるぐる走っていました。鹿谷小学校を紹介しようとすると、私には、鹿谷町の農道を力強く走る子供たちの光景は切り離せません。

鹿谷小学校は、水田に囲まれた学校です。私の担任している、3年教室からは道路よりも、水田やビオトープの方が近く、休み時間にはベランダから子供たちが生き物と遊びに飛び出していきます。10分の休み時間中にビオトープや水田、畑の生き物を捕まえ、教室に戻ってくることができるのです。時には昆虫に夢中になり、授業の開始時刻に間に合わない児童もいます。しかし、「外にいったはいけません」と教員が安易に外出を禁止することはありません。網を持ち夢中に駆け回っている子供の姿は、鹿谷小の職員に「子供はこうあっていいんじゃないか」と思わせてしまう、生き生きとした姿があります。

持続可能な社会を考えたとき、これから子供たちには「あたりまえ」の中にある輝きを見る力が必要だと考えます。そして、ここに教育の出番があると思っています。私たちの足下には何があるのかを知らなければなりません。教室から見える水田には、教材となるアキアカネ、キアゲハ、トビ、アオサギ、ケリ・・・と多くの生き物が存在しています。子供たちは、自然の中で学習を進めることができます。あたりまえにあるから、子供たちが直接手に触れ、観察し学ぶ事ができます。子供たちと水田に舞い降りた、真っ白な鳥（チュウサギ）を「きれいだねえ」とその特徴を観察しながら、コウノトリのように近づけない存在にしてはいけない、と思うのです。

そして、鹿谷には、鹿谷小を支えてくれる大人たちがいます。鹿谷小学校では全校児童でのよさこいが14年間続いています。よさこいは、地域のお祭りで披露され、衣装や化粧は保護者がボランティアで

準備します。教職員の指導、保護者の支援、地域の舞台があって、子供たちは輝くのです。PTAが協働することで、学校が輝くのです。

4年前には、鹿谷小学校6年生の児童が「赤とんぼを守ろう」「外来種を駆除しよう」と地域で活動し、発信しました。この児童の活動と発信を受け、鹿谷町民は外来種を駆除し赤とんぼに有害な農薬の使用をひかえたり、赤とんぼ調査を快く見守ったりしてくれています。

そんな、地域にある鹿谷小学校だから、教員も協働で日々の授業改革に取り組み、他校にない「赤とんぼ調査」や「外来種駆除」、「よさこい」などの学習活動も続けることができます。

本校にも、子供たちの問題行動は存在します。しかし、全職員が情報を共有し、全職員が児童の良さを見つけ、悩む同僚の良さを見つけ、支え合って前に進んでいます。

マラソン大会のコースには、数年前まであった要注意外来生物セイタカアワダチソウの姿は、少なくなりました。赤とんぼの舞う鹿谷の農道を力強く走る子供の姿は私の大好きな光景であり、これからもずっと続いてほしい光景です。



休み時間、ビオトープに入って遊ぶ児童

集中講座の報告

教職専門性開発コース 田村 佳子

心地よい風と澄み渡る空。セミの声を懐かしく感じる爽やかな季節となりました。今夏の私の集中講座は遡る事8月17日～19日、サイクル3よりスタートしました。2日目は附属中学校の実践研究会があったために抜けましたが、スクールリーダーの先生方もいらっしゃる、コラボレーションホールにいつもと違うピリッとした雰囲気は漂う、いわゆる集中講座らしいものでした。ただ誤算だったのは、昨年度の先輩方と同様、サイクル1から順番にやるものと思い込んでいたことです。順番が逆だったので多少焦り、3日間みっちりとはできなかったこともあり、自身の実践の展開を捉え直し表現し切れませんでした。このサイクルはとくに長期実践報告書にもつながっていくので、できる限り丁寧に組みたかった一つです。それでも、サイクル3だったおかげでスクールリーダーの先生方と語り合うことができ、ヒントを得たり、今年の4月からの実践を振り返ったりして、「ことがたり」の一部ではありますが書き始めることができました。さらに書き進め、経験の意味づけや価値づけを、より具体的に深めていきたいと思えます。

サイクル2・3はストレート院生のための補講で、9月中旬～下旬にありました。この9月の補講はM2で設定した期間ですが、9月中旬の附属中学校は教育実習生の授業が終盤に差し掛かり、週末には文化祭(2日目は合唱祭)、翌週末には合唱部の中部大会も控えている時期でした。私にとってはまったく集中にならず、いま現在も一人集中講座が続いています。しかし、一人では限界があります。語って聴いてこそ得ること、広がり深まること、問い直すこと、築

くことがあります。そしてスッと頭に入ってこないような分厚い本を読んでいて考えが煮詰まったときも、今までは想いの整理を手助けしてくれる院生や先生方がいました。今回はその大切さを感じることができただけでも良かったかもしれないと思えます。

今年は教員採用試験の関係で、正規の集中講座(7月のサイクル1・2)には出席許可が下りませんでした。採用試験中は試験に集中すべきですが、集中講座はじっくりと時間を確保し、できることなら合同カンファレンスのように、私たちストレートの院生にとっては大変貴重なスクールリーダーの先生方や大学の先生と話し合っ進めていくことで、深まったり膨らんだりすることが重要だと思います。時には混乱したままのときもあるかもしれませんが、そのときの先生方からのアドバイスが後々理解できることがあります。そう思うと、ストレートM2(できればM2に限らず採用試験を受けるストレート院生全員)の夏期集中講座は、何かしらの工夫が必要なのかもしれません。スケジュール上非常に難しいことだと思いますが、せっかくの機会をうまく活かせることができたらと感じました。

8月以降の私は、体調面の懸念から養生しながらの生活です。まず読む時間を確保することも厳しかったので、もう一度サイクル1から(サイクル1・2を絡めてサイクル3へと入っていく)集中講座を受け直したい気持ちでいっぱいです。まだレポートも仕上がっていない状況で、このようにニュースレターを書くことは非常に申し訳ないですが、少し私の中に芽生えたことを書きとめておきたいと思いました。

福井県幼児教育支援センター 観 寿子

3日×3セットの夏期集中講座。Cycle1「長期的にわたる学習展開とそれを支える教師の実践(実践記録を読む)」Cycle2「実践コミュニティ/学習する組織(実践架橋理論の検討)」Cycle3「実践の展開・実践者の力量形成・コミュニティのプロセスととらえ直す(実践の事例研究とその方法)」の各サイクルで、自分はどう学べただろうか。

「実践」と「理論」

Cycle1では、長野県伊那小学校の実践記録「学ぶ力を育てる」を読んだ。実践記録全体が、約20もの事例をもとに説明されていることに驚いた。そして、各項目の実践記録をまとめている文章が、ある意味理論と言えるものになっているのではないかと。理論は初めからあるのではなく、実践の中から生まれ、実

践に共通するエキスが理論となる。その理論を通して実践を見ることで、実践を分析することができ、そうやって実践から理論を見ることで、理論が確かなものになったり新しくなったりしてくということを実感した。Cycle2で読んだ「コミュニティ・オブ・プラクティス」の著者E. ウェンガーらも、多くの企業のコミュニティの形成にかかわり、それらの事例から、「実践コミュニティの構成要素、育成の7原則、発展の初期段階、発展の成熟・・・」というような理論を確立していったに違いない。

「コミットメント(熱意や献身)」と「人と人をつなぐこと」

「コミュニティ・オブ・プラクティス」の中で、一番心に残った部分は、実践コミュニティとは、「共通

の専門スキルや、ある事業へのコミットメント(熱意や献身)によって非公式に結びついた人々の集まり」であるという部分と、「ナレッジ・マネジメントは情報を集めることではない。人と人をつなぐことだ」という部分だ。私の勤務する幼児教育支援センターがまさにそうではないか、と感じたからだ。「学びに向かう力を育む保育・教育を推進したい」というセンター職員の共通の思い(熱意)が土台となり、園の先生方、園の管理職の先生方、市町幼児教育アドバイザー、市町行政担当課のすべてと県幼児教育支援センターがつながりながら、そのつながりを、一本の線ではなく網の目のようにつなげていく、こうして、現場内、現場と行政がつながり、よりよい保育・教育を目指して一緒に頑張っていきたいという流れが生まれパワーが大きくなっていく・・・そんな感触を、今年度感じるようになっていく。

「今後に向けて」

Cycle 1・2から2か月あまり、自分の実践をとらえ直す Cycle 3から1か月あまりが過ぎ、ここ数日間この原稿を書くために考えを巡らせていた。そしてふと、自分は、幼児教育支援センターで1年半「実践」をしてきたが、それを「理論」化し、次の実践へとつなげていかなければならない時期が今なのだと思った。(ニューズレターの原稿締切はなんて考えられたタイミングなのだろうか!)

センターに異動して、これまで知らなかった幼児教育の様々なことを知るたびに、自分のこれまでの小学校教員生活の中の反省すべき場面も思い出され、だからこそ、卒園した子どもをつなぐ小1年担任になってこんな授業ができる自分になりたい、という思いがふくらんできている。一方で、学校で子どもが

自分の力を発揮できる授業を考え実践することと、幼児教育支援センターで県内17市町それぞれの幼児教育の特徴を知り県としてその市町にどう支援できるのか考え実践していくことは、同じなのではないかとも思えてきた。

今年度、市町幼児教育アドバイザー研修を受講されている園長先生方、行政で幼児教育を担当されている方が力を合わせて、ご自分の市町の幼児教育をよりよくしていきたいという思いをもち、今年度、新しい取り組みを進めてくださった市町がいくつもある。センター主催の幼児教育研修では、その一環として、各市町の園を市町幼児教育アドバイザーとセンター職員と一緒に訪問し、園から園への移動中の車内や訪問後に話す時間をもってきた。ご自分の市町の幼児教育を考える中で、市町アドバイザーとしてこのような取り組みができるのではないかと、思いをふくらませて、センターに電話やメールをくださり、センターとして、一緒に園訪問をしてそれぞれの市町の様子をアドバイザーと共有したからこそ、その市町にニーズに合わせた支援を考えることができてきている。

伊那小の実践記録の中に引用されていたルソーの「エミール」の言葉を思い出す。「生徒が学ぶべきことを提示してやる義務は、あなたがたにはめつたにないのだと、はっきり考えてほしい。生徒の方で、それを望み、探究し、発見しなければならない。あなたがたのやるべき仕事は、それを彼の手の届く範囲に置き、巧みにその欲望を生じさせ、それを満たす手段を彼に提供してやることである。」

次の「実践」へ、1年次後半、取り組んでいきたい。

福井市明倫中学校 大村 正一

今年も暑い夏がまたやってきた。夏期集中講座。サイクル1、サイクル2、サイクル3とそれぞれ3日間、の開催であった。3日間、学校現場を離れ、どっぷりと実践書や専門書を読み込んだり、自身の実践を振り返ったりすることを通して、教職大学院で学ぶ意味を自分に問い直した。

サイクル1では、附属中学校の実践記録を読み解いた。「専門職として学び合う教師」のコミュニティを実現するために、どのような学校の研究体制や文化が構築されてきたのかを改めて知りたいと思い、この実践記録を読んでみた。また、附属中が実践している「探究する授業」が、どのように展開されていたかを知ること、本校でも研究していくアクティブラーニングの手掛かりとなればという期待をもつ

て読み進めた。テキストの全てを読み切り、自分に落とし込めたわけではないが、附属中学校のこれまで続いてきた学校文化がたくさん先生方の苦悩や努力を礎として成り立っていることを感じた。そして何より子どものため、学校のためにと自己研鑽したり、協働で探究し合ったりする附属中学校の先生方の姿に尊敬の念を抱いた。また、自分が大切にしていることは、やはり授業だということを改めて確認できた。自分の授業観はどうなのだろうと振り返ろうとする自分がいた。自身の授業について今一度見つめ直したいと感じた。附属中学校を創り上げた先生方のように、授業づくりに邁進する教師集団の土壌を研究主任という立場で本校にも創っていきたく感じた。アクティブラーニングの実践を一つの材料

に、明倫中学校の授業は何を目指して行われていくべきか、授業づくりの研究を推進していくためのリーダーシップを自分が発揮していきたいと強く感じた。

サイクル2は、実践の架橋理論の検討ということで、組織やマネジメントに関する理論書を読み解いた。私たちは、日々の教育活動において、様々なコミュニティを形成し、効果的に教育活動に当たっているが、現在の勤務校でも、研究部という視点から見ても4つのコミュニティを形成し、それぞれテーマをもって実践に取り組んでいる。そのコミュニティが、学習する組織として(学び合う教師集団)機能しているかどうか、この本を読んで、検証するきっかけを与

えてもらった。自分たちの取り組みと照らし合わせながら、今一度読み解いていきたい。

サイクル3では、これまでの自身の実践を振り返り、捉え直しをした。初めての研究主任という立場で悩んできたことや取り組んできたことなどを、文章にまとめ、グループの先生方に語ることで、改めて自分が何を大切にしてきたのか、これから何を目指していくべきなのかを考えることができた。

夏期集中講座が終わり、再び学校現場へ。この3日間の意義を感じながら、更なる実践の積み重ねを始めようとしている。1学期が終わるにあたり、研究主任という立場から、4つの研究組織が機能しているかどうかを問い直すことから始めたい。そして、2学期以降の教育活動の推進に取り組んでいきたい。

インターンシップ／週間カンファレンス報告

教職専門性開発コース 2年 田中 紗衣里

私たちストレートマスターコースの院生は、週1回、木曜カンファレンス(以下、木カン)を行っている。木カンは、午前中に行われる「学びの振り返り」「主担企画」と午後に行われる「公教育改革の課題に基づくプロジェクト学習」「授業改革カリキュラムマネジメント」の4つの内容で構成されている。これらの企画・運営は、午前の2つは主担当となった院生が、午後の2つをM2が中心となって行っている。10月の主担当は附属小学校・中学校にインターンシップに行っているメンバーである。今月私は、午前も午後も企画・運営する側となった。10月から再開する木カンであるが、企画などの準備は9月から始まった。そこで今回の報告では、「主担企画」と「公教育改革の課題に基づくプロジェクト学習」「授業改革カリキュラムマネジメント」のことを取り上げながら、木カン再始動に向けた動きを報告したいと思う。

まずは「主担企画」についてである。主担企画では、その月の主担当が1カ月のテーマを設定し、活動内容を企画する。今月は「それでも教師になりたいの？」というテーマに決まった。子どもに関する問題や学校と企業の違い、教職の特殊性などに目を向け、教員となって自分が求めることは何かを考えていく予定である。

今までにも何度か主担当をしてきているが、テーマ設定には毎回苦労する。主担企画は自由度が高い分、企画次第でその時間の充実度に差が出てくる。今

回、最初は違うテーマで行う予定だった。自分を高めることをテーマとして、院生同士でいい所探しをして肯定的な見方を身につけたり、今までの自分の中でのターニングポイントを探ったりという案だった。しかし案を詰めていくうちに「小学校の学活みたい…」となってしまう、廃案になったのだ。ただやってみよう！というだけでは内容が薄くなってしまふ。先生に企画のことを相談した際に、主担企画の進め方のイメージについて、「主担当がテーマに沿った話題を提供して、カンファレンスを通して考えを深めていく感じだといいいのではないかと」言っていた。そのイメージと「自分たちで自由に考えられる時間だからこそ普段目を背けがちな所を切り込んでいくことはできないか」というM1の意見をもとに今回のテーマ・内容が決定していった。

4週終えた時にそれぞれがどのような思いを持つようになるのか、不安でもあり楽しみでもある。様々な活動を通して、新たな気づきを得たり考えが深まったりする場にしていきたいと思う。

次に午後の内容についてである。10月の木カンが始まるまでに二度、M2と先生で会議(通称:M2会議)を行った。一回目の時に、午後で行うことの大枠を先生から提示していただいた。「公教育改革の課題に基づくプロジェクト学習」では、M1は「大学生版PISA」の作成、M2は公教育の意義について考えることを行っていく。「授業改革カリキュラムマネジメン

ト」では、前期にアクティブラーニングを意識した授業の単元デザインを行ってきた中で掴んできたことを生かして、後期はより多くの授業を作っていくことに挑戦していく。

この内容をどのように進めていくかは M2 が中心となって決めていく。二度の M2 会議でしきりに確認したのは「終着点はどこになるのか」という部分であった。

昨年の午後の木カンは、先生方が内容を毎回説明して下さり、その提示された内容のことについて、資料を探して読んだり、考えたりしていた。「公教育改革の課題に基づくプロジェクト学習」に関して言うと、去年は 3 月のラウンドテーブルで M1 は大学生版 PISA, M2 は公教育の意義についてのポスター報告が最終のまとめとなった。すべて終えてやっと、それまでにやってきたことのつながりが少しわかった気がした。しかし、やっている最中は何を目指してやればいいのか方向性がわからずに苦しむことも多かった。そういった経験がある現 M2 だからこそ、どういった方向性で取り組んでいったらいいのかを明確にしたいという議論が持ち上がったのだろう。

木々も色づき始め、街行く人々の装いもすっかり秋らしくなった。週 3 日のインターンシップを中心とした生活も、夏休みを挟んだとはいえちょうど半年が過ぎた。4 月当初に比べれば、インターン校での生活にもかなり慣れてきて、毎日充実した日々を送ることができている。しかしながら、慣れてきたが故にインターンシップとして何を学ぶべきかモヤモヤする時もあったように思う。半年という節目を機に、インターン生としての学びを振り返りたい。

8 月某日、学部時代の友人と話す機会があった。今年度採用された 1 年目の教師や一般企業で働く者など、分野は様々だが皆新社会人として頑張っているようであった。そんな彼らに、「大学院で何してるの？」と尋ねられた。親しい友人の前で、「長期インターンシップにおいて教師の総体を学び、実践的指導力を高めている」と堅苦しく言うのも気が引けるため、「週に 3 日、小学校で勉強してるよ」と伝えた。すると、友人は「副担任みたいなものか」と言う。この時、『そういえば自分って副担任なのか』という疑問が芽生えた。

インターン校での私の動きは主に以下の 4 点に分けられる。①授業参観、②気になる児童への個別支援、③TT のような授業補助、そして④授業実践である。

今年も 3 月のラウンドテーブルでポスター発表する予定になっている。去年の経験をもとに、「この期間にはこの程度まで進めたい。そのためにはこの日にはこの内容をしよう。」というように各回の内容を決めていった。そして 10 月の初回では、これから行っていく内容を M2 から伝えるオリエンテーションの時間を設けることにした。運営に携わることで 4 月の段階よりも午後の時間の意義を感じることができている。その意義を会議に参加しているメンバーだけでなく全員で共有できると、木カンの中での話し合いも深まっていくのではないかと思う。

この報告を書いている現段階では、午後のカリキュラムに良いイメージが持っている。しかし、今掴めている感覚が正しいかどうかわかるのは実際に木カンが始まってからである。自分たちも実際にやってみて気づくこともあるだろう。今後も定期的に M2 会議を開いて、振り返りや次回の内容検討・計画の修正を行っていく。先生方のアドバイスや M1・M2 の声を取り入れながら、木カンが有意義な時間となるようにしていきたい。

教職専門性開発コース 1年 増谷 淳

これらを通して、学校現場で教師としての資質を学ばせていただいている。当初は学級を 1 年間丸ごと見ることができる点から、「学級づくり・学級経営」を私自身のテーマとして掲げていた。「先生はどのように学級を作り上げていくのだろう、児童はどのような学級集団となっていくのだろう」ということを学ぶつもりでいた。しかし実際は、ある児童(以下 A)への個別支援が中心になっていく。A は授業中立ち歩いたり、言動が乱暴であったり、時には、先生に対しても反抗的な態度をとることさえある。その A に関わり続けた結果、学級“集団”ではなく A という“個”ばかりに目がいき、私のインターン生活は A に付き添うことが中心となってしまった。私の肩書は副担任なんかよりも、『A 専属支援員』の方がふさわしいだろう。

大学では週に 1 日、インターンシップの振り返りなどを行うカンファレンスが行われる。そこで A 中心の日々だったことを振り返ると、「どうしてそこまで A に関わっていくことができるの？」と質問された。「自分が止めないと周りの児童が迷惑する…」、「誰がどうみても一番支援が必要な子…」など様々な思いが浮かんだものの、私は「彼に期待しているからです」と答えた。A はただ粗暴なだけではなく、体

育の授業や休み時間に遊ぶ時などは学級の中心として活躍している。その姿を見て、Aが学級を引っ張ってくれるリーダーになれるのではないかと期待してしまう。担任の先生は目指す学級像の1つに「児童同士が良さを学び合う学級」を挙げられた。ならば、Aと他の児童が学び合い、その中でAがリーダーシップを発揮することもいつかできるのではないだろうか。その関係性を築くためには、私が一教師として“個”と“集団”の両方を支える必要があるだろう。それぞれの児童の良さをもっと知りたい。そして、当初の目的であった「学級づくり・学級経営」というテーマに立ち返り、より一層学級集団全体に目を向けられるようにしたい。

話が戻るが、学部の友人は「新米教師が授業の上手さでベテランの先生に勝てるわけがない。せめて一番楽しいクラスを作ってあげたい」と語る。授業の進め方はもちろんだが、褒め方や叱り方、子どもとの関わり方でさえ、私は未熟な点ばかりである。だが、インターン生だからこそできることがあるのかもしれない。がむしゃらに児童と関わったり、インターン校の先生方にアドバイスを頂いたりできる。日々のイ

ンターンシップを院生同士で振り返ったり、大学の先生に相談することで新たな視点を得たりもできる。日々の実践と振り返りを繰り返すことができるのは、我々ストレートマスターの特権と言える。

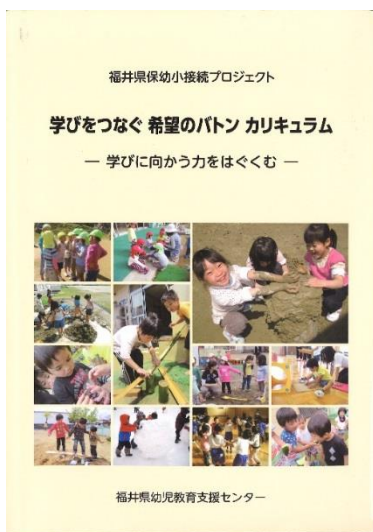
ある児童には「先生は2年間しか学校にいないの？その後もいてほしい」と言われた。私が彼らの成長を期待しているとともに、彼らも私のことを一教師として認めてくれているようだった。インターン校の先生方も気さくに話しかけてくださる。素晴らしい環境で学ぶことができていることを改めて実感する今日この頃。この貴重な時間を無駄にしないためにも、気を引き締めていきたい。私は担任ではないし、副担任でもなく専属支援員でもない。だが、一人の教師として学級を支えるとともに、教師としての実践的指導力を今後も学び続けていきたいと思う。春のラウンドテーブルも過ぎ、前期残り二回となった木曜カンファレンスの日、今年初めて蝉が鳴き始めた。振り返ってみれば、厚手のコートを着てインターン先の小学校に挨拶に行った三月末のことが遥か昔に感じられる。それから約三カ月の学びの日々は、今の自分の中に生きている。

研究紀要・実践報告書の紹介

保幼小におけるカリキュラム・イノベーションの方へ

福井県幼児教育支援センター『学びをつなぐ 希望のバトン カリキュラム』の紹介から

福井大学教職大学院 稲井 智義



はじめに

福井県幼児教育支援センターは「福井県保幼小接続プロジェクト」の一環として、2015年3月に「福井県保幼小接続カリキュラム」を一冊にまとめた。それが、今回紹介する『学びをつなぐ 希望のバトン カリキュラム：学びに向かう力をはぐくむ』である。本稿ではこの冊子を紹介しながら、最後

にカリキュラムを作りかえること（カリキュラム・イノベーション）の意味を考えたい。

本冊子の概要

福井県教育庁義務教育課は、2012年10月に幼児教育支援プログラムを作成し、同年11月に福井県幼児教育支援センター（以下、センターと表記）を立ち上げた。そしてセンターは県内5つのモデル校区で、「福井型18年教育」の土台となる保幼小連携のあり方についての研究を進めてきた。この二年を超す年月を経て練り上げられた保幼小接続カリキュラムが、本冊子にまとめられている。

本冊子は、カリキュラムをどのように捉えるかについての課題を提起していると、私は理解した。実際に福井県は、教育内容の配置を表す旧来型のカリキュラム理解ではなく、「子どもが自ら学ぶ経験」の総体としてカリキュラムを定義し直した。本冊子はこの点を子どもの姿から確認して保幼小接続カリキュラムを具体的に示すために、五歳児と小学校一年生の二年間を中心とする「学びに向かう力」の育ちの事例を紹介する。また「学びに向かう力」は「友達と共通の目的や課題に向かって、子ども自身が主体的に遊びや活動を発展させていく力」と定義された。こうして本冊子は、保育者・小学校教諭にこの力の育ちを見通すための“見取り図”を示している。

構成は先の内容が記された「はじめに」のほかに、「Ⅰ総則」、「Ⅱ内容」、「Ⅲ連携推進」、「Ⅳ実践」、「パンフレット」、「おわりに」、「参考文献」である。ここでは、「Ⅳ実践」から二つの事例を紹介する。五歳児の「劇遊びをみんなでつくろう」（91-94頁）では、「ないたあかおに」を題材に、「友達を思いやる気持ち」を感じとってほしい保育士の思いと、「みんなで一緒に作って遊びたい」子どもの願いが交わりながら劇遊びを作った。劇遊びを進めると、効果音をどうするかが話題になる。子どもたちは鬼の登場や動きには「太鼓」の音がよいと思い、鬼が止まるときや走るときの打ち方を考え、アイデアを出す。その時の保育者は、「一人一人のイメージや考えを聞きだす司会者のような役割を果たす」という。あるいは二年生の「国語「おにごっこ」「みんなではなしあってみよう」（99-100頁）では、足が不自由なA子がクラスの中で「クラスみんなが楽しめる鬼ごっこ」を考え、みんなで遊ぼうと話し合った。ここでも明示されていないけれども、小学校教諭は「司会者のような役割」を果たしたと思われる。つまり事例や保幼小の制度を超えて、子どもの考えを子ども同士で共有する教師の役割が書かれているのであろう。

その他にも、事例から見えた「学びに向かう力が育つ」実践のポイント（Ⅳ実践）や保幼小で連携した取り組み（Ⅲ連携推進）、事例と学習指導要領との重なりやずれ（教科横断的な取り組み含む）を示す図表

（Ⅱ内容）も豊富に収められている。読者はこれらを手がかりに、新たなカリキュラムを考えることができる。

おわりに：カリキュラム・イノベーションの方へ

本冊子は、今年度からセンターが始めた保育士・幼稚園教諭研修の資料として、参加者と各保育所・幼稚園・認定こども園に配布された。また福井大学教職大学院教員も、センターの研修事業に協力している。私は本冊子を読み研修事業に参加しながら、二つのことを考えた。一つは、実践を記録して話し合う意味である。本冊子の作成に向けて、モデル校区の保育者・小学校教諭やセンター職員の間で実践記録を手がかりにカリキュラムについて話し合われたと推測される。また研修事業では、中堅保育者が「園内リーダー」として、ベテラン保育者が「市町アドバイザー」として、実践を見て記録しながら園や部署、地区を越えて話し合っている。私はこの取り組みを知る中で、実践を立ち止まって見つめ直すことを同じ園以外の人と進めることが実践の意味を（再）確認する役割を果たすと感じた。

またもう一つは、子どもの学びに誰が関わるかである。先の事例のように、子どもが学ぶために教師の役割が重要であることは否定できない。しかし子どもの学びを確認することは、教師以外にもできる。実際に「ないたあかおに」の事例では「お家の人に見てもらえることができた」、「お母さん、泣いてた。」というように、親・家族が子どもの学びを見ていた。

つまり子どもが学んだことを誰かが見て確かめるという側面が、教育実践には含まれる。この点に関わるのが、カリキュラム・イノベーションである。この視点を提唱する小玉重夫は、文化祭での総合学習の研究発表のように日常の授業成果を市民に開放する動きに、カリキュラムを市民が批評する空間を教師が作る「カリキュラムの市民化」の可能性を読み取っている。さらに小玉が中心となって進めた近年の共同研究は、「誰がカリキュラムを決めるのか」という問いに対して、「地域や学校、市民という、より教育

現場に近いところでカリキュラムの決定を行うようなシステムが考えられないだろうか」と提案している（小玉重夫『学力幻想』ちくま新書，2013年，東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会編『カリキュラム・イノベーション：新しい学びの創造へ向けて』東京大学出版会，2015年）。

この視点によれば，子どもの学び（子どもが自ら学ぶ経験）としてのカリキュラムを決定したり評価したりすることが，実践を記録して話し合う教師だけ

でなく，親を含む地域住民や市民との間でも求められている。それは，地域や社会に生きる学力を形成するうえでも重要ではないか。だとすると子どもの学びを共有するという課題に，教師・行政職・研究者は今後どのように関わるか。私は本冊子を読み研修事業に関わる中で，保幼小におけるカリキュラム・イノベーションの方へと足を進め，幼児期の子どもへの教育を含めた公教育のあり方を追究したいと考え始めている。

Schedule

11/7 Sat 福井大学教育地域科学部附属幼稚園 第27回幼児教育研究集会

研究主題「学びの芽生えを育む～自分から遊びたくなる環境づくり～」

11/14 Sat 合同カンファレンスA

11/21 Sat 合同カンファレンスB

11/27 Fri 福井大学教育地域科学部附属特別支援学校 第14回教育研究集会

全体研究テーマ「学校・地域・家庭のつながりの中で育つ～一人一人が活動と参加の質を高める～」

11/29 Sun 長崎大学「実践研究 長崎ラウンドテーブル」

12/4 Fri 福井大学教育地域科学部附属小学校 第41回教育研究集会

研究テーマ「聴き合い，つながり合って，学びを深める授業をつくる」

【編集後記】教職大学院内外で，さまざまな仕事と活動を進めている方々からご寄稿いただきました。期せずして4つの文章が幼児教育に触れています。このことは今日の学校改革の状況を表しているとともに，今号の一つの特色でしょうか。最後に書き手と読み手の交流を作り出すこのメディアが，子どもたちの学習権を保障して，みんなのことを自分たちで決める民主主義を学習する学校を創り出すきっかけになることを願っています。（稲井）

教職大学院 Newsletter **No.77**

2015.10.17 内報版発行

2015.10.31 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp
